

二本松戊辰戦争戦没者慰霊祭 = 11月3日 二本松市民会館にて =

150年の時を経て、二本松戊辰戦争で犠牲となられた方々を改めて弔う^{とむら}

戊辰戦争開戦から150年が経つのを機に、1918(大正7)年以来100年ぶりの開催となった二本松戊辰戦争戦没者慰霊祭には、約700人の方が参列し、東軍(旧幕府軍)・西軍(新政府軍)を問わず、この地で亡くなられた犠牲者全員のみ霊を悼みました。式典の中では、東西両軍の藩があった自治体の首長から映像でメッセージが寄せられ、奥羽越列藩同盟を代表して、米沢藩があった山形県米沢市の中川勝市長からは「ともに戦った絆が時を超え、未来に向かって、友好・交流の輪につながってほしい」と述べられました。また戊辰戦争当時の二本松藩主・丹羽長国公の妻の出身地で、二本松藩に西軍への降伏を幾度となく打診したとされる大垣藩があった岐阜県大垣市の小川敏市長からは、「歴史を教訓に、未来志向の関係を構築したい」というメッセージが寄せられました。

安達高校と安達東高校音楽部員16人は献歌を披露。二本松の戦いでは、部員と年代が近い多くの少年が戦場に出たという歴史を踏まえ、自分たちで歌を選び、式典に臨みました。=あなたの命も私の命も、決して奪われるためにあるのではないということ=故郷を守るため若い命を散らした二本松少年隊をはじめ、犠牲者全てへの思いを歌詞に乗せ、平和を願うハーモニーが、会場内に響き渡りました。



1_二本松市民会館のステージ上に設置された祭壇 2_慰霊祭開式後、式辞を述べる三保市長 3_福島県副知事の鈴木正晃氏による追悼の辞 4_米沢藩主上杉家17代御当主の上杉邦憲氏による献花 5_安達高校と安達東高校の生徒合同による、戊辰戦争の犠牲者全てへの思いを歌詞に載せた献唱 6_式典終了後、第2部の追悼行事で居合を披露する岳下小学校の児童

二本松戊辰戦争戦没者慰霊祭 祭文 さいもん

本日ここに、二本松戊辰戦争戦没者慰霊祭を挙行するにあたり、戦没者諸士に対し、謹んで祭文を奏上いたします。

今を去る百五十年、戊辰戦争は慶應四年一月に京都における鳥羽・伏見の戦いに端を発し、江戸城の無血開城後、新政府軍はその矛先を徳川將軍家から会津藩、庄内藩へ向け、東北地方に侵攻するに至りました。

二本松藩は、仙台藩、米沢藩と軍議を重ね、会津藩の新政府軍への謝罪降伏をもって和平解決への道を探っておりましたが、それが叶わず、不幸にも藩領が新政府軍の侵攻の途上であったがために、結果として奥羽越列藩同盟の最前線として、これを迎え撃つこととなりました。

もとより二本松藩においても朝廷に弓を引くなどという考えは毛頭なく、降り懸かる火の粉を払うが如く、只々攻め寄せる大軍に對して列藩同盟への信義を貫き、士道に殉じる道を選びました。

しかしながらこれを迎え撃つ二本松藩の兵は、少数にて、老人、農民、町人、そして少年までも戦場へ出さざるを得ず、多くの犠牲を払う結果となり、藩の戦死者は総数三百三十七人に上ります。少年兵の中には、自ら抜刀することができないほど体が小さい十二歳の少年も含まれており、また、その少年兵らの撤退を助けようと自らの命を擲ち、新政府軍に決死の切り込みをした藩士達の存在も語り継がれています。今、これらを想う時、万感胸に迫り、内心忸怩たるものがあります。

戊辰戦争から百五十年を経て、本日、本慰霊祭に臨み、改めて、歴史の狭間において我が国や郷土の将来を想い、志半ばで斃れられた貴い先人達に思いを馳せ、哀悼の念をいよいよ深くするものであります。

結びに、戊辰戦争で亡くなられた全ての方々の御霊に、末永く頭を垂れ、香華を手向け続けていくことをお誓いするとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成三十年十一月二日

二本松戊辰戦争戦没者慰霊祭

二本松藩主 丹羽家十八代当主

丹羽長聰



祭文を読まれる、二本松藩主 丹羽家18代当主の丹羽長聰様

※この祭文（犠牲者へささげる言葉）は、式典当日に丹羽長聰様が読まれたものを、そのまま掲載しています。